

1. みなさんこんにちは。私はディアンдре・トンプソンです。私はハティ・ガードナーです。私達は外国語教育とインターカルチュラリティ、「異文化相互理解」：日米比較研究についての研究の結果についてお話致します。
2. これがこの発表の概要です。
3. なぜこの研究をしたかですが、それは、わたしたちがサービスラーニングの授業を受けた際、多文化の人々を結びつけ、平等さと公平性を大事にしなければいけないことを学びました。また、インターカルチュラリティが留学した際にとっても重要であり、日本とアメリカでの外国語教育ではその能力をつけるためにどのような教育をしているのかをもっと知りたいと思ったからです。また、私たちは、言語教育に携わりたいのでこの研究の結果を踏まえていい先生になりたいからです。
4. これが、私たちの研究質問です。
 - 一、自分が受けた外国語教育をどのように思っているか。
 - 二、外国語は、異文化に対する知識をどのように深めるのか。
 - 三、外国語教育は学生と多文化社会を繋げるためにどのような役割を果たしているのか。
5. まず初めに、この研究の背景についてこの順序でお話いたします。
6. まず初めにアメリカでの外国語の履修登録の動向についてです。外

国語教育に関しては州によって異なりどのぐらい履修しなければならないという制約はありませんが大学に入学するため一般的に高校での二年以上の学習が必要です。

7. 日本の場合は今までは中学校三年、高校三年、そして、大学で一年から二年と少なくとも六年から八年間は英語を勉強します。
8. しかし、グローバル社会に対応できる人材を作るため日本では小学校からの英語の導入を奨励しています。早い所は小学校三年生から始めます。
9. しかし、英語教育は大学に入るための入試試験に集中されるため、実際に使える英語教育とはことなるのが現状です。

10. ではここでどのぐらいの学生が海外留学するのでしょうか。この図に示されているように2013年から2014年にかけて5%留学する数が増えています。

11. 日本の場合は2004年から徐々に海外留学する学生の数が減ってきています。その理由には経済不況などがあげられますが国ではグローバル人材を増やすために2020年まで留学生を12万にまで増やす予定です。

12. では、アメリカでは外国語教育はどのように扱われているのでしょうか。この図にあるように大きく二つに分けることができます。オポチュニスト時代とディスミッシブ時代に分けられます。オポチュニスト時代は言語は世界で活躍できる大事な能力として見ら

れていましたが、1980年代からのディスミッシブ時代には外国語教育はあまり重要視されなくなりました。しかし、近年、再び外国語教育の重要性が見直されてきています。

- a. それは、異文化に対する柔軟性とインターカルチュラルリティの向上、世界での経済政策での勝ち抜き、国の安全のためと学力向上と問題解決する能力に貢献するからです。

13. 日本では1964年の東京オリンピックを境に使える言語が必要だという認識が高まりました。つまり、今まで文法重視の授業ではコミュニケーションの力が養われないことが明らかになりました。
14. そのため、1970代年からコミュニカティブ・アプローチが重視されるようになりました。
15. また英語を話す母国語話者を学校の授業に来てもらうため、1989年に政府はJETプログラムを発足しコミュニケーション能力を高め外国語教育の充実と地域の国際交流の推進を図る事業に力をいれるようになりました。
16. また、近年英語のクラスは英語で行うべきだという考えが広まる一方、その実現には教師の養成も関わってくるため難しく今対策が練られています。
17. 2014年には小学校から英語を教えることが奨励されています。

-
18. これはアメリカの外国語教授法の編成を表したものです。アメリカも1800年代をみとみると文法翻訳中心の教授法でしたが、1986年にACTFLのプロフィシエンシーガイドラインが全米に普及して以来実生活で対話ができる能力、そしてグローバ社会での異文化

で柔軟に対応できる人材の養成に力をいれるようになりました。

19. また、アドバンスド・プレースメントテストはナショナルスタンダードが基本となっており、アメリカでの外国語教育ではなま教材が使われることが重要視されるようになりました。

20. 日本の場合アメリカと同じようにコミュニケーションが重要だと様々な計画を立てています。

21. しかし、やはり日本では外国語教育が大学入試が目的となっているためテスト内容が読み、書き、聞く、話すの四技能に集中されています。そのためコミュニケーション中心の内容に切り替えることは難しいようです。

22. アメリカで使われているのがWorld Readiness Standardsで1996年のNational StandardsにCommon Coreや21世紀のスキル等を取り入れ、このグローバル化した社会で通じる言語教育をめざしたものです。

23. このようにコミュニケーション、文化、コネクション、比較、コミュニティの5つの分野に繋がりをもちながら行うように奨励しています。

24. 日本の場合は文部科学省のアクションプラン「戦略構想」に基づいて経済・社会等のグローバル化が進展する中、子ども達が21世紀を生き抜くためには、国際的共通語となっている「英語」のコミュニケーション能力を身に付けることが必要であるという理念の基に

読む・書く・聞く・話すの4技能を伸ばすようにガイドラインが作られています。

25. ここでモチベーションについてみてみましょう。言語を習得する上では動機がとても重要です。動機には外因性と内因性の2つがあります。どちらの動機も大事ですが、内因性の動機が特に言語習得には大事なようです。

26. また言語習得には学習者にとってどのくらい不安度が高くなるかで左右されます。例えばあまりにも話す時に不安度が高くなると普段の実力がでないこともよくあります。不安に関してはコミュニケーションをとる際に生じる不安、テストを受ける際に生じる不安、それから評価を受ける際に生じる不安があります。ある程度の不安を感じるのは言語教育には大事ですが、ありすぎても習得が妨げられます。

27. これはアメリカの学生と日本の学生が不安を感じる状況についてまとめた物です。アメリカでは発音を間違える時、人前で発表する時などが挙げています。日本では文化の違いにより生じる誤解、試験等で良い成績をとらなければいけないというプレッシャーや人前で間違えること等を気にして不安になること等があげられています。

28. ここで言語習得に大事な物として最近注目があてられているのがインターカルチュラルリティです。これは、異文化をお互いに認めあ

いその文化にあった表現をつかうことです。

29. インターカルチュラルリティは言語能力が高くなるに従いその国の文化に精通してくるため母国語話者のようにその国の文化にあった話ができるようになるのです。上級になるに従い言語と文化のギャップが少なくなります。
30. インターカルチュラルリティを外国語の授業内で学べると一番いいのですが、やはり現実的には留学をしてその国で生活することでその力がつきます。しかし授業でもペンパルとの交流等は地域での活動を交えた内容を組み入れていくことが大事です。
31. それではここで研究の結果についてお話しいたします。参加者は日本人34名、アメリカ人30名の合計64名でアンケート調査をオンラインで行いました。
32. では研究質問1の外国語教育について大学生はどのような経験があるのかについての結果です。
33. 自分達がうけた外国語教育に関しては約90%のアメリカの学生と65%の日本の学生が外国語教育に対して肯定的な経験を持っていたのに対し、3割以上の日本の学生が外国語教育に対して否定的な意見を持っていたことがわかりました。
34. 肯定的な意見としてアメリカの学生は外国語の先生方が楽しく教

えてくれるので”あまりクラスでプレッシャーを感じない。実際勉強をするのが楽しかったと答えていました。良い経験をしなかった理由にはスペイン語を学んだ最初の二年間、私の先生は、私と同じくスペイン語をあまり理解していなかったので、理解が深まらなかったと言っています。

35. 肯定的な意見としては日本人の学生は大学での英語の授業は会話もするので、おもしろかったと答えていました。良い経験をしなかった理由には文法中心で一方的な授業だったので退屈だったとある女性の学生が答えています。
36. 否定的な評価に対する先生への不安に関してはほとんどの日米の学生は、先生に間違いを直されることに対しては不安に思っていない。
37. いつも他の学生の方が優れているのではないかという不安に対しては約70%のアメリカ人の学生が他の学生の方が自分より優れていると思っているのに対し、約60%の日本人の学生は優れていないと回答しました。
38. 試験でいい成績を取るため、プレッシャーを感じるかという間にはアメリカ人の学生の方が、日本の学生よりとプレッシャーを感じるようです。
39. 授業中に準備しないをで話さなければいけない時、うろたえてし

まうという不安度はどちらの学生も不安度が高いです。

40. では外国語の授業でどのぐらい地域とつなげたプロジェクトなどをしたことがあるかという質問にはどちらの学生もボランティア・サービスラーニング、ペンパル、海外との姉妹交流等のプロジェクトに参加したことがあると答えました。
41. それではここで研究1の質問のまとめをしたいと思います。アメリカの学生の方が日本の学生より外国語の授業では肯定的な経験を持っていることがわかりました。その理由として先生が良かったから、授業で会話ができたから等の理由をあげています。否定的な理由としては、日本の場合、書く・読む・聞くに焦点がおかれ話す力が伸びないこと等があげられました。また不安度に関しては外国語の授業ではアメリカの方が日本人よりクラスメートと自分を比較したり、テストへの不安があります。驚いたことは、日本人もアメリカ人も外国語の授業には地域とつながったプロジェクトを取り入れていたと答えたことです。
42. では研究質問2の、外国語は異文化に対する知識をどのように深めるのかについての結果を話します。
43. 今まであなたの国で取った外国語のクラスの中で、最も高いレベルはアメリカ人の大半は中級レベルの授業を取っていた一方、日本人の大半は上級レベルの授業を取っていました。

44. ではこれから外国語の プロフィシェンシーに関しての質問の結果です。質問の難易度は初級から上級までACTFLのプロフィシェンシーガイドラインと基にした「自己能力評価」をしてもらいました。また言語教育の現場において、各学年や学期ごとの目標の記述、全体的自己評価や教師による評価のために使うチェックリスト、タスク達成評価に使われているACTFLとNCSSFLのCan-do statementをしました。
45. 外国語能力の自己評価に関してはアメリカ人も日本人も自己能力評価に関してはにみて初級の下から中級の下が多いという同じようなレベルに自己評価しました。
46. ではここでインターカルチュラリティに関する結果について話します。ここでは中級レベルのタスクに基づいてデータを分析しました。
47. ではその国の文化に即して招待を受けたり断ったりできるかに関してはアメリカの学生は日本の学生に比べて外国語で招待を受けたり断ったりする事に自信を持っているようです。
48. ではその国の文化に即した方法で贈り物をあげたり、受け取ることができるといふ点に関しては日本人よりアメリカの方が、外国語を用いて贈り物をあげたり受け取ったりする事に自信を持っています。

49. では会話をする際その国に即したボディーランゲージを使ったり、うまく話のやりとりをしたり、会話をさえぎったり、同意したりすることができるでしょうか。これに関しては日本人よりアメリカの方が、自身を持っています。
50. 誰かがくしゃみをした時、乾杯をする時、また、褒めてくれた時など、その国の文化に即した方法で対応することができるかについては日本人よりアメリカの方が、上手く対応できるという自信を持っています。
51. ここで研究質問2をまとめます。日本人の学生の方が上級レベルまでの授業を取っているのに比べ、アメリカ人学生の大多数は中級レベルの授業までしか取っていませんが外国語の能力の自己評価は同じレベルになったことは面白い結果でした。つまりアメリカ人の学生と日本人の学生の「話す」能力は似たようなレベルに評価されたのはこの日本の外国語の授業はまだコミュニケーションを重視した教授法は取り入れていないというリサーチを裏付けています。私たちが調査を通して得たことは、インターカルチュラルリティにおいて自信を持っている日本人が少ないということであり、これが実際の社会で適切に外国語を用いる事が難しいことを示しています。
52. では研究質問3の外国語は学生と多文化社会を繋げるためにどのような役割を果たしているのかの結果です。
53. 約70%のアメリカ人は外国語教育によって多文化コミュニティと

つながりを持つことができたと同意したのに対し、約50%の日本人は同意しないと回答しました。

54. 60%のアメリカ人の大学生と59%の日本人の大学生は学んでいる言語の母語話者との関係を築くことができると同意した。しかし、アメリカ人の大学生の方が日本人の大学生より非常に同意すると回答した割合が多かったです。

55. 93%のアメリカ人は、外国語教育が他の文化をより深く理解するのに役立つと回答した。一方、68%の日本人も同じように回答しました。

56. ここで研究質問3をまとめます。大半のアメリカ人は外国語教育を通して多文化社会とつながりを持てたと認める一方、日本人の意見はほぼ二分化されました。

一般的に、日米の学生が感じたことは、彼らが母語話者と同程度の関係を構築できたということであり、アメリカ人はそれをより強く感じていました。

おそらくこのことは、外国語が交流の幅を広げるとともに、調査の対象とした学生が概して良好な留学制度を持つ大学に通っているからだと推察されます。

日米の学生は外国語教育のおかげで、より他文化を理解し、受け入れるようになったことに賛同するのに対し、7%のアメリカ人と32%の日本人がこれに反対しています。このことは、アメリカでの外国語授業における対話と他文化理解を重視しているところに因るのか

もしれません。

57. アメリカ人の方が日本人よりインターカルチュラルリティに高い自信を示すのは、熱意のある教師や、対話と他文化理解を重視すること、対象言語の話者と多文化社会との強いつながりがあるからだと考えられます。また必ずしも外国語を使う不安が、外国語教育に伴う学生の良い経験、もしくは悪い経験を左右するというわけではありません。むしろ、教師と授業内容が決定要因となっています。

日本人はアメリカ人に比べて多文化社会とのつながりが薄いと感じていますが、日本人がアメリカ人と比べ単一民族国家であり、多文化社会に接する機会が少なく地域の多文化社会に関してプロジェクトの発展に繋がらない可能性があると考えています。

したがって、授業を通じた多文化かつ多言語社会との関係を持つ機会を生み出し、実際に対象言語が用いられている社会で使う機会を提供することによって、授業での経験がより肯定的なものとなり、インターカルチュラルリティが増すと思います。

58. この研究の限界点は参加者がカリフォルニアからであること、また大半の日本人はアメリカに留学中の学生や、私たちが日本に留学中に出来た友人であるため、この結果は一般化出来ないことです。

59. 将来、大学と、高校での学習をわけて調査してみたいです。そうすることによりそれぞれのレベルでどのようにインターカルチュラルリティを習得するかその過程が詳細にわかると思います。

60. 調査の文献

61. 調査の文献

62. 調査の文献

63. そして最後は謝辞です。アドバイザーの齋藤-アボット佳子教授と関根繁子教授がこのキャップストーンに手伝ってくださった事に感謝しています。今年卒業する日本語専攻のクラスメート達、翻訳の手伝いをしてくださった日本人の友達感謝しております。皆さんありがとうございます。